

さいたま
見沼

よみさんぽ

2018
Vol. 27

シリーズ 身近な生き物
犬は名セラピスト



写真家 野口勝宏

シリーズ 身近な生き物

犬は名セラピスト



犬と出会うとき、多くの人は自然に笑顔になるのではないのでしょうか。まるで、いつもは隠れている、人間の優しい部分を引き出してくれるみたいです。こんな犬の力に着目したのが「セラピー犬」です。

セラピー犬は、主に病院や高齢者の施設、障害者施設などを訪問し、入院・入所者と交流しています。そのことで人びとの心を和ませたり、元気にしたりと、生活の質の向上に貢献しているのです。他に、小学校では「動物とのふれあい方や、命の大切さを学んでもらう」ため、総合学習などの授業に参加もあります。図書館では、子どもが犬に本を読んで聞かせるというイベントもあります。元気や優しさなど、主に心の部分で人の役に立っているというのが、セラピー犬の仕事です。

動物と飼い主の駆け込み寺

ここさいたま市でも、セラピー犬の活動が埼玉県立小児医療センターで行われています。活動の中心は、七里動物病院（さいたま市見沼区）の中村悟先生です。やどかりの里にも近いので、お話を伺おうと、七里動物病院を訪ねました。

そこは住宅地の中にある一軒家、「街の動物病院」といった佇まいです。いざ診察室へお邪魔すると、ラブラドルのフローネが元気よく出迎えてくれました。足元に寄り添い、その温もりに早速癒されます。

中村先生は兵庫県生まれ、ブランド牛の但馬牛で有名な地域に育ちました。動物が身近な存在になったのは中学生のとき、牧場での職場体験がきっかけだそうです。

「始めは『牛を診る獣医師』を目指していましたが、大学卒業後、縁あって

川口動物医療センターに3年間勤務し、1994（平成6）年に七里動物病院を開院しました。犬猫の患者さんが多いですが、他にもプレーリードッグ、ハリネズミ、ハムスター、うさぎ、リス、フェレット……ヤギを診たこともありますね」。まさに動物たちの駆け込み寺、ほんとうに多様な患者さんが来院されているようです。



中村先生と井出さん、フローネとタラコ

飼い主にとっても頼りになるのが動物病院。「初めて犬を飼う人など、こういう環境にしたらいいか、戸惑っている飼い主さんもいます」と話すのは、動物看護師の井出加奈子さん。もともとドッグトレーナーでした。その経験を活かして来院した方の声に耳を傾けます。中には「どんな子を飼ったらいいか相談したい」と、高校生が訪れたこともあったそうです。「犬と人、互いのニーズが合った子を飼うことが大切です」とは、井出さんからのアドバイス。

中村先生がセラピー犬の活動を始めたのは、恩師から老人ホームを紹介されたことがきっかけで、開院当初から関わってこられたそうです。日本動物病院協会（JAHA）の一員で、ボランティアの飼い主さんたちのチームリーダーとして活動してられました。長く続けられた理由を伺うと、「始めてもう17年くらいになりますが、多くのボランティアさん、ご協力いただいている動物病院の先生方、施設スタッフの皆様のおかげだと思います」

セラピー犬の活動に触れて

セラピー犬が実際に働いているところを見学させていただくため、中村先生の活動拠点の1つ、埼玉県立小児医療センターを訪ねました。セラピー犬と子どもたちの間にはどんな交流があるのでしょうか。初めての体験に胸がわくわくします。

控室で待っていると、11頭のセラピー犬と飼い主（ボランティア）の方たちがやってきました。それだけで、看護師さんにも、センター職員の方たちにも笑みがこぼれます。ここで、犬に水をやったり、ゆかたを着せたり。まるで犬たちが、仕事前の心の準備をしているようにも見えました。



自己紹介中のクレマとハク



思わずうっとり

そして、中村先生を中心に事前ミーティングが行われ、犬の健康チェックがあります。お手伝いをする病院のボランティアの方もいらして準備は整いました。隣の部屋には子どもたちも集まってきているようです。

犬たちをつれて入室すると、子どもたちもお母さんたちも、期待にあふれた表情になりました。最初は犬の自己(?)紹介です。大きな犬はゴールデンレトリバーのリング、ゴールドンドゥードルのティガ。小さな犬はプードルのタラコ、パピヨンのチイカ、チワワのアテナ、ハクとクレマは母と子です。中くらいの犬はアメリカンコッカークのチョコ、イングリッシュコッカークのミミ、Mixのナツなど。

「犬にふれるときは、自分の手をグーにして、犬のあごの下へもって行ってくださいね」という説明があったあと、それぞれの子どものそばに犬たちが近づいてゆきます。おずおずと手をのばしていた子も、すぐに頭をなでたり体を



おずおずと手をのばして

をさわったりできるようになって、少しだけ緊張していた部屋の中は、急ににぎやかになりました。部屋の前を通りかかったお医者さんも、ニコニコしながらのぞきこんでゆきます。

子どもが少しくらい乱暴にさわっても、犬たちはおとなしく座っています。

頭をなでてもらって、うっとり目をとじている犬もいます。ひととき落ち着きのある犬は、中村先生の病院にいたラブラドルのフローネでした。盲導犬として訓練を受けたけれど足が悪かったため、中村先生に引きとられたとか、納得の経歴でした。他は、どの犬も家庭犬としてのしつけだけで、セラピー犬としての特別な訓練はしていないそうです。「人が好きで、なでられるのが好きな犬なら大丈夫」と、たいていのボランティアさんがおっしゃいました。セラピー犬として働くことがストレスにならないことが大事だそうです。

それにしても、まだ知名度が高いとはいえないセラピー犬の活動に、参加するきっかけは何だったのでしょうか。ボランティアの方に伺うと、動物病院や介護などご自身の仕事の関係でという方、アメリカでセラピー犬の活動があるのを知ってという方、自分自身が小児がんだったという方、中には飼った犬がおとなしくてセラピー犬に向いていると思ったという方もいらっしゃいました。

さてそろそろ、子どもたちも犬になれてきました。リードをひいて、病院の廊下へ散歩に出かけます。車いすでも点滴台があっても、犬との散歩に支障はありません。犬も周りの大人もみんなが子どもたちを見守っています。中には犬をとりかえて、5回も散歩をしてきた子もいました。「気分は草原」だったのかもしれません。50分ほど犬と一緒に過ごした子どもたちは、犬に見送られ元気にバイバ



一気ににぎやかになる室内



散歩に出かけるリングとティガ



周りの人も自然に笑顔に

イをして病室に戻ってゆきました。

部屋には笑顔の犬(?)とボランティアさん、そして和やかな空気が残りました。このあと短い反省会があって終了です。かわる人に自然と笑顔をもたらすセラピー犬たちを見て、その存在を求めている人は多いと

実感しました。

最後に中村先生は「実は他の施設からも、セラピー犬に来て欲しいと声をかけてもらっています。私自身、いつか児童施設でもやれたらなと思っていますが、診療外の時間となると、なかなか難しいのが現状で……参加している動物病院もまだまだ少ないんですね。こうした活動が、さらに広がっていいなと思っています。犬たちもみんな年を取っていき、何年かしたらドロップアウトする時期がきます。もし関心のある方がいらしたら、ぜひ活動に参加してもらいたいと思います。

セラピー犬は、年に2度健康診断と口腔内や便の細菌検査が必要ですが、ふだんは活動日の前にシャンプーをするくらいです。これまで訪問先での事故やアレルギーの発症などの事例はありません。出かける前のあわただしさにトイレをすまさずに出かけて粗相をしてしまったことはありましたが……。ただ、犬がストレスを感じていると思ったらすぐにやめなければいけません」と話してくださいました。

犬や猫は、私たちにとって、心穏やかにしてくれる身近な存在ですが、今回ご紹介した、きりりと仕事をこなすセラピー犬たちの頼もしい姿は、まだまだ知られていないのではないのでしょうか。ボランティアの皆さんの熱意にも、とても頼もしさを感じました。(取材 並木せつ子、萩崎千鶴)

犬の物語

並木せつ子



『『刑務所』で盲導犬を育てる』(大塚敦子著 岩波書店 2015 年刊)

盲導犬候補のパピーは、生後2か月から1歳までの10か月間、「パピーウォーカー」というボランティアの家庭に預けられます。これは人間との生活を楽しめる犬に育てるための大切な期間です。

この「パピーウォーカー」を刑務所で引き受けるというプログラムが、2009(平成21)年に日本で初めて実施されました。訓練生(受刑者)は点字点訳の職業訓練を受けながら、10か月間パピーの世話をします。最初の年は全部で3頭、4人1組で1頭のパピーを担当しました。職業訓練の合間や寝る前に、基本的なしつけ・食事・排泄・グルーミングなどの世話をし、寝るときも一緒。忙しいけれど、かわいくてたまりません。

でも、夜鳴きや下痢で睡眠不足の日があったり、訓練生同士のいさかきがあったり、最初の年は順調な日ばかりではありませんでした。10か月後、3頭のパピーは訓練生に慈しみや達成感など、たくさんのものを残して巣立ちました。プログラムはその後にも継続し、刑務所で育てられたパピーの中からは、2015(平成27)年までに6頭の盲導犬が誕生したということです。

『ベル・リア；戦火の中の犬』(シーラ・バンフォード著 評論社 1978 年刊)

舞台は第二次世界大戦中のヨーロッパ。戦火の中で、飼い主たちに勇気や喜びをもたらした1匹の犬の物語です。

その犬は、動物に芸をさせて稼ぐ旅の女に飼われていました。女が銃撃を受け亡くなると、イギリス将兵と旅をすることに……。ところが、戦火は激しくなり、1人の飼い主のところに留まることを許しません。将兵から看護兵、老婦人と飼い主は変わり、名まえも看護兵には「リラ」と呼ばれ、老婦人には「ベル」と呼ばれました。

見知らぬ同士だった3人の飼い主は、犬にたぐりよせられるように一堂に会し、犬の名まえは「ベル・リア」になりました。そして戦争も終わり……。

あの街 この街 俊一郎が行く・21

かりさか 雁坂峠を越えて

晩秋の候

山梨から埼玉へ向かうために、雁坂峠を目指します。峠を過ぎ、紅葉の盛りを終えた山の夜道は空いていて、乾いた空に浮かんだ月の鋭い光が、沿道の木々を照らしていました。時々、助手席のカミさんと言葉を交わすけれど、2人ともどこか上の空。頭の中は仔犬のことでいっぱいでした。

2匹の仔犬

仔犬のアタリを付け、問い合わせたのは山梨の犬舎です。早起きが苦手な私が、その細っこい犬専門の犬舎に着いたのは、日が傾きかけた午後の時間でした。ごく普通の一軒家に足を踏み入れ、適当な挨拶を済ますと、本題の仔犬の話題になります。希望する犬のタイプを聞かれますが、そもそも良し悪しを判断する知識がありません。それを伝えると、せめてオスかメスだけでも決めて欲しいと言われ、飼った経験があるからという理由でメスと伝えます。すると、買い手のついていない仔犬を大きい順に見せてくれました。一頭は、わりとガッチリした茶色の仔犬。もう一頭のグレーの仔犬は、小さく華奢で頼りなかったのですが、ちょこちょこよく動く仔犬でした。

選ぶことがつらい

詳しく聞くと、茶色の仔犬がガッチリしているのは、2匹兄弟のうちの一頭で、母乳を好きなだけ飲めたからだろうと、反対にグレーの仔犬は6匹の末っ子で、競争が激しかったらしいということです。よく調べている人は、白い斑の入り方や鼻の長さなど、それぞれのこだわりで犬を選んでいくそうです。意に添わず、選ばないで帰る人もいるのだとか。しかし、ゼンマイのおもちゃのように転がり続ける仔犬を前に、冷静な判断などできるはずがありません。やっと懂れていた犬が手元に来る。この日までにしてきた苦労を考えると、どんな

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）



犬でも大切に迎えられる気持ちでした。

ただ、悩ましいのは色と体格。色の好みはグレーの仔犬でしたが、茶色の犬の体格の良さは魅力的でした。いろいろと心配事を質問しつつ悩み、これ以上時間を取るのも気がひけると感じ始めた2時間くらい経った頃、「2頭とも譲ってください」と後先考えずに伝えていました。

雁坂峠を越えながら

雁坂峠を抜けて、秩父に至る夜道を進みます。もともと2頭買うことは想定していました。一頭は自ら選んだ仔犬として、もう一頭は、いろいろな理由で身寄りがなくなった保護犬などを迎えられたらいいと漠然と思っていました。おそらく、成犬を迎えることになる後者のほうが、確立した性格も承知で迎えられるので、むしろ楽に思っていたのです。でも、2頭の仔犬を目にして、そんな理論的な判断はできなくなっていました。2頭迎えることについて、犬舎の人は、「わがままに育たないから」と好意的な意見。そして、1週間判断する時間をくれました。仔犬同士が育った時に、相性の問題が発生しないか……自問を続けます。

しかし、留守番が多くなる我が家。遅めの夕飯を食べるために立ち寄った秩父駅で、味噌豚の丼物を食べながらカミさんに私なりの結論を伝えます。「2頭迎えよう」と言う私に、カミさんも同じ意見でした。



「安心して地域で暮らし続けたい」という思いの実現に向けて

(仮称) あおぞらハウス建設始まる

今回は、(仮称) あおぞらハウスの建設が始まるにあたり、「地域で暮らす」を支えるやどかりの里グループホームについてご紹介したいと思います。

やどかりの里は、1970（昭和 45）年から、病気が安定しているのに、さまざまな事情で精神科病院を退院できない人たちがたくさんいることに対して、地域に住まいの場、働く場、憩いの場などをつくりながら、活動を進めてきました。

グループホームでの暮らし

やどかりの里のグループホームは、アパートなどの賃貸物件を利用して、日常生活を送る中で必要となる支援を届けながら、障害のある人が地域で安心して暮らしていけるよう活動しています。現在、やどかりの里グループホームの定員は 58 名で、見沼区、大宮区、浦和区に点在し、入居者の平均年齢は 60 歳を超えています。



ただ今、建設準備中

日中は働く場に通って仕事をしたり、憩いの場に通って仲間と交流したり、仲間と集って過ごしたり、音楽や読書などの趣味を楽しんだり、みな思い思いの暮らしを送っています。

どう暮らしたいのか、どう生きていきたいのかに寄り添って

グループホームの入居者

に今後希望する暮らしを尋ねてみると、「今の暮らしを続けていきたい」という人が多くいます。その理由は「せっかく退院できたのだから、もう入院したくない」「慣れた今の暮らしを変えたくない」「今がいちばん幸せ」「親しくなった仲間といっしょにいたい」「今の自由気ままな暮らしがいい」といったものです。

一方で、歳を重ね、よりきめ細かく手厚い支援が必要になってきている人もいます。そして、既存のアパートタイプのグループホームで暮らし続けることが困難になる人も出てきています。十人十色の暮らしを実現するためには、住まいの場のバリエーションはまだまだ足りていません。

今回建設する(仮称)あおぞらハウスは、木造平屋建てのバリアフリーの住居になっており、車いすでの生活にも対応できるようになる予定です。やどかりの里としても初めて建てるグループホームで、地域の方々のご理解とご協力をいただきながらの新たなチャレンジになります。

「あおぞらハウスがあってよかった」そう思えるようなグループホームをつくっていけたらいいなと思っています。

(記 鈴木 裕貴)



あおぞらハウスイメージ図

対話と調和の 自治会活動づくり

島崎 昇さん
(中川自治会自治会長)



島崎 昇さん

やどかりの里がここ見沼区中川を拠点に活動を始めたのが1972(昭和47)年。以来、中川自治会には、さまざまな形でご理解、ご協力をいただきながら活動を進めてきました。

今回は、グループホームあおぞらハウス(仮)の建設にあたり、地鎮祭にも出席いただいた中川自治会長の島崎昇さんに、中川自治会について、やどかりの里についての思いをお聞きました。

中川自治会と島崎さん

島崎さんは秩父のご出身で、46年ほど前に中川に居を構え、暮らし始めました。最初に自治会の役割を担ったのが、くじ引きで当たった交通対策委員でした。今は道路標識の整備も進んでいますが、当時は委員のみんなで、手作りの交通安全の看板を作って立てていました。その頃は家も少なく、やどかりの里の付近

も森になっていて、森を通して自治会館に行っていたそうです。環境衛生班の方たちは、真夏に1件1件お宅を回り、床下消毒をやっていました。中川自警消防団は、当時から活発に活動していて、お婿さんをもったら、まずは消防団に入って顔を覚えてもらいなさいという習わしもあったようです。地元のことは、ほんとうにみんなよく知っていて、支え合いながら暮らしていたようです。

その後、後継者として期待されて副会長に任命され、当時の会長をサポートしながら、老朽化した中川自治会館の建て直しを進めました。ところが、当時の自治会長が急逝され、島崎さんが急遽自治会長の任を引き継ぐことになりました。

たいへんだった、みんなが使える自治会館づくり

さいたま市や神社庁への手続き、

神社の宮司さんや自治会の人たちとの話し合いなどを一手に担い、自治会館の建設を進めました。

「自治会長というものは、何の後ろ盾もない中で、話し合いながら少しずつやっていくしかない」と島崎さん。勤め人だった頃に労働組合委員長を務めた経験も活かし、さまざまな意見を取りまとめ、自治会にとって何が大切かを考え、障壁を乗り越えて中川自治会館は建設されました。同時に、あやふやなものをしっかりさせたいという思いで、自治会を任意団体法人に法人化し、自治会館も法人の所有という位置づけにできるよう奔走しました。「最近、みんなが自治会館を使ってくれるようになってきた」と島崎さんは嬉しそうに目を細めます。

中川自治会とやどかりの里

やどかりの里が中川で活動を始めた当初より、自治会として応援をしてくださいました。現在でも、自治会の夏祭りや運動会へのお誘い、やどかりの里バザーの開催など、さまざまな形でご協力いただいています。「お互い付き合うには礼を尽くしたほうがいい」と島崎さん。やどかりの里にも快く足を運んでくださり、自治会とやどかりの里との橋



ふれあい広場でのバザーの様子

渡しをして下さっています。

温かい眼差しでやどかりの里を見守って下さっている島崎さんに、「しっかりやれよ」と励まされた思いです。

これからもよろしくお願い致します。
(記 鈴木 裕貴)



中川自治会館

〒337-0043 さいたま市見沼区中川 694-2

048-685-9945

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…？

お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-793-6373

～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



布製品をオーダーメイド製作いたします！

お気軽にご相談ください。

1F！サイクルショップ「すてあーず」営業中！

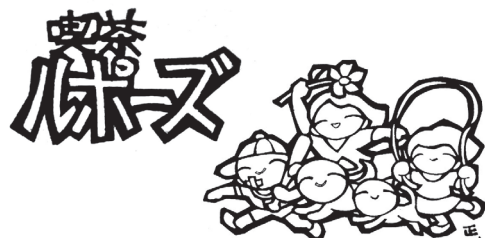
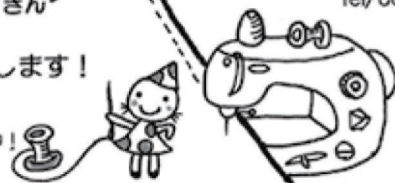
Tel/687-4483（直）

公益社団法人 やどかりの里

すてあーず

南中野 844-22 イエローハウス

Tel/688-8223



営業時間 月～土 10.00-17.00

さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202



おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を支えます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

＊おかゆや刻み食も対応します
＊ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付> 月～金（祝日を除く）8:30～18:00

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています！

1マス（64mm×46mm） 5,000円

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 **鴻沼福祉会**

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



い ち ず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりにこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を
使用しています。（一部商品を除く）

この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、貸詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注
しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890（担当オガワ）

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所（中央区） ●あざみ共同作業所（見沼区） ●そめや共同作業所（見沼区） ●きりしき共同作業所（中央区）
●さいたま障害者労働センター（桶川市）

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
●なつめホーム（以上、中央区） ●のぞみホーム（見沼区） ●ひかりホーム（西区）

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢（以上、中央区）

●見沼区障害者生活支援センター来人（見沼区）

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。

全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動を続けている。

野口勝宏オフィシャルサイト

<http://noguchi.photo>

ススキ

ススキには「芒」「薄^{かや}」「萱」「尾花」。いろいろな表記があります。秋の七草としては「尾花」として入っています。

地名はその土地の特徴から来ていることがよくありますが、山形県の尾花沢市はススキ（尾花）の群生地です。沢が多く点在していたからとも言われています。

屋根材や家畜の飼料として利用するため、集落近くの刈り取り場所だった萱場のそばに住んでいたのが、私の知り合いにもいる「萱場さん」なのかもしれません。ススキは秋の深まりを感じる情緒ある植物ですが、北米では侵略的外来種に指定されているのが意外です。

さいたま見沼よみさんぽ 第27号

発行 2018年10月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

今年1年、よみさんぽでは「身近な生き物」に関するお話をお届けします。今号は「犬」に注目しました。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動が続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同